

婦人と子ども

大正六年一月一日
第十七卷第一號

現代文化と幼児教育の研究

現代ほど、文化の諸方面から、幼児教育の研究に有益にして適切なる貢獻をして呉れる時代はあ
るまい。否、將來に於ては、此の幸福は益々増し
加へられるに相違ないが、從來の、諸文化が幼児
教育に殆んど何等有用な關係を有して居なかつた
時代に比すれば、實に天地霄壤の差があるといつ
てもよい。昔日、幼児教育の研究者は、據つて以
て知識的基礎とし、科學的參照とすべき、何等の
學問をも與へられなかつた。故に、彼等は、一つに
老人達の經驗と自分等の常識とに訴へる以上に、
其の研究を深くすることも確かにすることも出来
なかつた。その結果は、幼児教育の研究を、何の
精緻も、深味もない、粗大にして淺薄なるもの
にして仕舞つた。昔の幼児教育研究者が、充分に深
い興味を其の研究に有し得なかつたのも、無理か

らぬことであつたのである。之れに反して、今日
は實に、多くの學問と知識とが吾々の研究に參加
し、手傳つて呉れる。而して、其の興味を、いく
らでも深く與入りさせて呉れる。幸福なるは現代
の幼児教育研究者である。

幼児教育の研究に最も密接した適切な關係をも
つて吾々を補助して呉れる學問の第一は、輒近に
於ける諸教育學説である。一般教育學の知識が幼
兒教育の研究に大切なる關係を有すべきことは、
昔から言はれて居た。しかし、事實上、從來の教
育學、殊にヘルバルト或は其の餘流を主調とする
觀念主義教育説は、幼児教育のために、特に大し
た密切な接觸を有するものではなかつた。故に、
幼児教育研究者は、形式上の準備として、一應之
等の教育學を通過して置けばそれで足りた。それ

だけに何の貢獻せらるゝ處も多くなかつた。然るに、晩近の諸教育説に至つては、その作業主義説にせよ、生活中心主義説にせよ、美的教育説にせよ、殊に所謂人格主義教育説の如き、いづれも、極めて密なる接觸を以て、幼児教育の研究に相獨れて來る。若し、幼児教育の研究といふことを先きにして之れ等の晩近教育説に對すれば、殆んど、下世話に所謂詭へ向きに過ぎたるの觀ある位である。

次に、近世の發生的心理研究の進歩も、幼児教育者にとつて、最も好都合なるものゝ一つである。其中、兒童研究に就ては言はずもがな。殊に民族心理學の研究は、實に豊富なる好參考資料を、幼児教育の研究に提供して呉れる。曰く道德の起原其の發達、曰く藝術の起原其の發達、其他、民族心理學の取扱ふ總ての問題が、一つとして幼児教育の研究に、必須の知識たらざるものはない。

第三に、近世美學の諸研究も、幼児教育研究者にとつて、非常に大切な善知識となるものである。吾人は、普通心理學、殊に純理論的な、就中彼の

構成主義心理學などよりも、美學によつて、幼児教育の研究を助けられることが却つて多い。美學といへば、最近の繪畫藝術の大きな傾向、假令は彼の印象派や後期印象派の作品、殊に其の畫論の如き、幼児教育の研究者に、どの位大切な知識と訓練を與へるものであるか分らない。

以上は、たゞ主なるものを一例として擧げたに過ぎない。しかし、之れだけを見ても、現今の幼児教育研究者が、如何に、よき時代に際會して居るかは、感謝するに餘りあるのみならず、幼児教育の研究が、之等の諸學問の方へも少からぬ貢獻を與へ得る。斯くて、現代の幼児教育研究は、幼児教育研究といふ、狭い特別の世界に、規模の小さい、底の淺い、生氣のないことをして居るものではなくなつた。穿てば何處迄も穿てる。掘れば何處迄も掘れる。擴げれば、何處迄でも擴げられる。そこに總ての學問的研究が有する、鈍ることのない無際限の興味と熱心が湧き上るのである。

愉快なるは幼児教育の研究である。而して、幸福なるは現代の幼児教育研究者である。